ズームアップ
ZOOM UP ―― 小島染織工業株式会社

伝統的な「武州正藍染」と革新的な「染色加工」の両輪で、さまざまな業界の染織ニーズに応える

江戸時代から武州地域の地場産業として続いてきた「武州正藍染（ぶしゅうしょうあいぞめ）」。創業以来152年の歴史を持つ小島染織工業は、伝統的な武州正藍染を軸にしつつも新しい技術を用いた藍染め以外の「染色加工」にも業容を広げ、両輪で成長を続けてきた。BtoB向けの染織・染色事業のほか、自社ブランドを立ち上げBtoC事業も展開する同社。藍染めのポテンシャルを広く伝えようと開発した商品は、若者やインバウンド客の間で注目を集めている。

代表取締役　小嶋 秀之氏

- ●代 表 者　代表取締役　小嶋 秀之
- ●創　　業　明治5年
- ●設　　立　昭和24年12月
- ●資 本 金　4,800万円
- ●従業員数　30名
- ●事業内容　武州正藍染、染色整理加工、繊維製品製造、綿合繊織物卸
- ●所 在 地　〒348-0024　埼玉県羽生市大字神戸642-2
  TEL 048-561-3751　FAX 048-561-4456
- ●U R L　https://www.kojimasenshoku.com/

江戸時代後期から藍染めが盛んだった羽生や加須、行田を中心とする埼玉県北部の武州地域。この地で作られる正藍染を施した織物が“武州正藍染”だ。農家の女性が農閑期を利用して農作業着を作ったのがその始まりといわれ、最盛期には武州地域の一大産業となった。

羽生市に本社を構える小島染織工業株式会社は、この武州正藍染を中心に「染め」と「織り」を手がけてきた老舗企業である。同社の強みは、伝統的な手作業を守りながら武州正藍染の量産体制を敷く点。そして藍染め以外の分野では、最新鋭の染色機を設備し、新しい技術を用いた「染色加工」を行う点だ。

「藍染め生地の販売先は主に剣道を中心とする武道着メーカーや祭りの半てんなどを扱うメーカー、そのほかアパレル、インテリアメーカーです。“かせ”と呼ばれる輪の状態にした糸を藍の染料に浸して引き上げ、絞ってほぐす。これを繰り返して染める伝統的な“かせ染め”にこだわり、糸を芯まで濃く染めて織るのが特徴です。染色加工場では、さまざまな加工設備が整っているので、帆布や刺子（さしこ）織のような厚手の生地の染色加工を得意としています」（小嶋秀之社長）

同社は時代や社会のニーズに合わせて伝統を守りながら、同時に革新的技術を取り入れた新たな分野へのさまざまな挑戦を続け、顧客が求めるモノづくりに応えてきた。

藍染めから染色加工へと市場を拡大

創業は明治5（1872）年頃。農業の副業として行っていた藍染め織物を企業化したことが、同社の始まりとなる。農作業用股引きの小幅先染織物製造でスタートし、明治20年頃には行田市の足袋産地向けの織物製造を開始する。

その後しだいに合成繊維が普及し始めたほか、農業の機械化に伴い農作業着の需要も減少。最盛期には地域に数百軒あったという藍染め事業者が徐々に姿を消していった。そうした中、同社は農作業着から剣道を中心とした武道着市場に活路を見いだし、藍染め織物事業で成長を続けていく。

さらに昭和初期には新しい技術を導入し、藍染めとは別に、新たに染色加工場の操業を開始した。こうして二つの事業の柱を持つことで幅広い業界の製品を

手がけ、技術とノウハウ、知見を積み上げ、強みとしていった。

小嶋秀之氏が社長に就任したのは、平成17（2005）年。商社勤務を経て家業に入り、6代目となった。

「社長になり、さらに200年続くような事業の基礎を作らなければいけないと思いました。そこで、自社で手がけているものをベースに、将来につながるものを生み出していこう、と考えました」

そして“自社ならでは”の製品開発に向けた同社の挑戦が始まった。

藍染めの魅力と可能性を追求し、商品を開発

海外に売れるものを作りたい――その思いで挑戦したのが、デザイン性の高い生地の開発だった。

「農作業着から剣道着まで、長年培ってきた“かせ染め”や“刺子織”の技術は当社の強みです。それらをさらに現代の暮らしに通用させるためには、新しい発想と染色技術が必要だと考えました」

企画開発チームでスタートしたこのプロジェクト。グラデーションになる染めと織りの研究を行い、あらゆるノウハウを駆使して美しく見える生地作りに挑んだ。そしてようやく製品が完成する。

「藍染めは染料に浸ける回数で色の濃淡を調節します。染め分けた糸をグラデーションになるように生地に織り上げました。そしてシャツやワンピースにして展示会で発表しました」

これがバイヤーの目に留まり、新たな市場が開けていった。

「この製品で、当社の技術や藍染めの可能性を知ってもらうことができたと思います。提案先が広がりましたし、社内的にも開発の機運が高まりました」

海外の展示会へも出展し、同社に注目した欧州の高級ブランドから生地開発の依頼を受けたり、衣類やバッグ用の生地を納入するなど、活躍の場が世界へと広がっていった。そして開発したグラデーション生地をはじめ、素材作りからこだわったブランド「KASE by KOJIMAYA」を立ち上げ、販売を開始。すでに立ち上げていた自社ブランド「小島屋」と併せて展開していった。これらの製品は、それまで藍染め製品に触れる機会がなかった若者やインバウンド客の支持を得てファンを増やしている。

武州正藍染と染色加工事業の特徴

同社の「武州正藍染」の特徴であるかせ染め。その

かせ染めの様子

綾出しの様子

シャトル織機

染色加工場

工程は、①綿糸を輪にする“かせ上げ”から始まる。②次に、職人がかせ状態の糸を伸ばしたりほぐしたりして糸の綾文様を整える“綾出し”を行う。これは染め上がりを左右する重要な工程だ。

③そしてかせ染め。かせを藍の染料に浸けて絞り、職人の手で糸をほぐしながら、染めの状態を確認。これを十数回繰り返して染め上げる。その日の気温や湿度等で染まり具合が変化するため、職人の勘と経験が重要になってくる。これによって糸の芯まで濃紺に染め上げられ、織り上がった時に温かみのある自然な縞「青縞」が生まれるのだという。

その後、④染め上がった糸は、洗って糊づけをして乾

燥させ、円筒形に巻き直される。

そして、ここからが同社の藍染め織物のもう一つの特徴でありこだわりでもある⑤“シャトル織機”での製織だ。昭和40年代製のこの織機からは、現代の織機では生み出せない柔らかな風合いが生まれる。

「剣道着メーカーのお客さまは、“勝ち色”といわれる深くて濃い紺色を求められます。それには糸の芯までしっかり染まるかせ染めが一番適している。さらに、道着を着た時の立ち姿の見え方についての要望も寄せられます。それにはしっかりした生地でありながら自然な風合いが出るシャトル織機が必要になってくるのです」

シャトル織生地

グラデーション生地

小島屋製品

一方「染色加工」は、織物をローラーに巻いて染色するジッガー染色機をはじめ高圧ドラム式染色機、液流染色機など多様な染色機を設備し、新しい染色技術を活用して布地から製品の染色までを行うのが特徴だ。また、さまざまな生地の防縮やウオッシュ加工といった仕上げ加工や撥水加工など幅広い加工も行っている。技術試験室では、コンピューターシステムを用いて、要望に沿ったスピーディーな色合わせを実現。近年は草木染や自社独自の仕上げ加工などで顧客から高い評価を得ている。

成長を支える社員一人ひとりのモノづくり

同社では、若手社員が活躍している。染織技法を受け継ぐ現場では、どのような技術の伝承、教育がなされているのだろうか。

「先輩について教わるOJTが基本ですが、同時に各種のマニュアルも作っています。ただ、マニュアルがあっても、その通りにならないケースも多く、なかなか難しい。一人ひとりが経験を積んでいくことが重要だと思っています」

小嶋社長は社員の特性や得意分野を生かした人材配置、良好な社内環境に気を配る。

「現場では担当する持ち場のローテーションを行います。一つ得意分野を作り、さらに複数の持ち場を持つことができるようになること。これによって新しい適性を見いだしたり、社員間のコミュニケーションや社内の風通しもよくなる。社員のモチベーションも上がります。今後も社員全員で知恵を出し、力を発揮しながら事業を進めていきたいです」

伝統と革新の両輪で200年企業を目指す

近年、これまで手がけてきた業界以外からの染色加工の発注が増加しているという。例えば、資材メーカーなどから工場で使うベルトの染色依頼や、廃車になった車のエアバッグをリサイクルするための染色など、業界も内容も多岐にわたっている。

「藍染めのような伝統的な織物作りと新しい技術を取り入れた染色の両方を行う会社はほとんどありません。その点において当社は独自性があり、人も設備も整っている。これは他社にはない強みだと思います。今後ますます社員の力を生かして、新しい分野に挑戦していきたいです」

技術を磨きノウハウを積み上げながら活躍するフィールドを広げてきた同社152年の歴史。これからも時代や社会のニーズに応えながら、伝統と革新の両輪で200年企業に向けて挑戦を続けていく。